

## 教員と学生の成績評価に関する認識の相違点

西 垣 順 子

教育システム研究開発センター

内線 7135 jnishig@gipac.shinshu-u.ac.jp

### 要 旨

成績評価に関する教員の考え方と実施している成績評価の実態、および学生の成績評価方法に対する要望について調査した。半数近くの教員が、学生の考えと教員の考える成績評価のあり方に違いがあると感じており、成績評価そのものというよりも、学生の学ぶことに関する意識の持ち方に対する疑問が、多く表明されていた。教育効果をもたらす成績評価という観点から、現状の成績評価のあり方を評価すると、ポジティブな点とネガティブな点がひとつずつ指摘できた。ポジティブな点は、丸暗記では回答できない問題を試験に出している教員が多数派であることであり、ネガティブな点は、テストやレポートを返却して採点結果をフィードバックしている教員が少ないことであった。この点は、学生の要望からも乖離していた。

### キーワード

成績評価、誤った学習観、評価の基準と回数、フィードバック、教育効果

### 1. 目 的

本研究は、学生と教員間の成績評価に関する態度の相違点を明らかにし、あわせて本学において教員が実施している成績評価の実態についてのデータを得ることを目的とする。

学習者にとって成績評価は最も気になる授業の1要素である。学習を行う目的は、その学習内容(知識や技能)を身につけることである。成績評価は、それらを身につけたかどうかを確認するために実施される。つまり、高い成績を得ることと学習目標を達成していることは、本来は一致しているべきである(もちろん、測定誤差はいかなる状況においても存在する)。そうであるからこそ、良い成績を取ることが学習目的にもなりうるのである。

しかし実際には、学習内容の習得と成績評価が一致しているとは限らない。成績評価に際しては、知識や技能を習得したかという学習の結果よりも、どの程度努力したかといった学習の過程が重視されることもある。過程を重視することで、学生の学習動機を高めることができれば、その結果として学習は促進されるのであるから、このような成績評価の方法自体は、悪いことではない。

問題は「過程重視」というときに、それが具体的に何を指しているのかを学習者が理解していない場合である。例えば、「努力」を「授業に出席すること」とのみ、学生が考えている場合がある。この場合、学生の積極的な学習意欲が高まることは期待できない。学生が誤った認識を持っていることに教員が気づいていれば、それを修正することも可能であるが、

気づいていなければ両者のすれ違いが続き、結果として教育成果は望めなくなる。

## 2. 調査1 学生の成績評価に関する認識に対する教員の考え

成績評価について学生が正しい認識を持っているかどうかに関して、教員の印象を調査した。

### 調査対象者

信州大学の専任教員405名。学部別の内訳は、人文学部31名、教育学部43名、経済学部17名、理学部41名、医学部97名、工学部58名、農学部38名、繊維学部71名、その他6名であった。

### 調査方法

次の二つの項目について、「強くそう思う」から「全くそう思わない」までの5件法で回答してもらった。回答時期は2003年1月であった。

項目1 成績評価のあり方に関する自分の考え方と、学生の考えが一致していないと感じる

項目2 学生は単位を認定されるために自分が何をしなければならないか、理解していないと感じる

### 結果と考察

それぞれの回答を示した教員の人数を、図1に示した。半数近くの教員が、成績評価に関する教員の考えと学生の認識の不一致を感じているのが伺える。

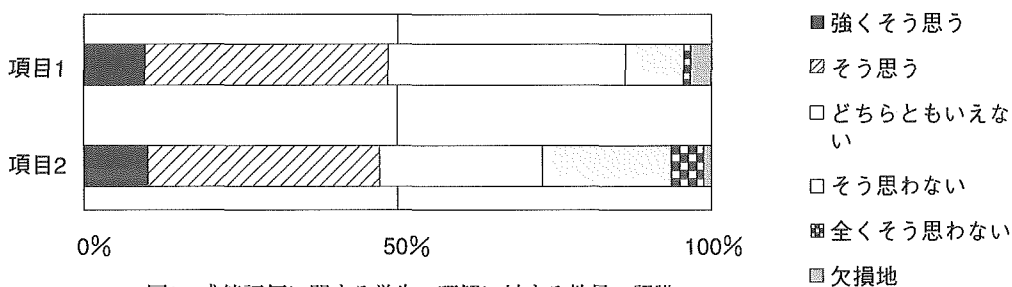


図1 成績評価に関する学生の理解に対する教員の認識

この結果を受けて、教員が感じている「不一致」についてさらに詳しく検討するために、以下の4つの調査を実施した。まず調査2では、教員が実施している成績評価の実態について検討するために、試験問題の作成方法について調査した。さらに、教員の考えと学生の認識の不一致について具体的な状況を知るために、成績評価に関して教員が感じている疑問や悩みについても回答を求めた。また調査3から調査5で、学生が考える成績評価と、教員が実際に行っている成績評価の相違点について調査を行った。

### 3. 調査2 試験課題に関する現状と教員の悩み

試験（テスト、レポート、口頭発表を含む。以下同様）は成績評価の中心であり、どのような試験が行われるかは、学習そのものを左右する。教科書を丸暗記すれば正答できる試験が行われる場合、学生はひたすら教科書を丸暗記する。応用問題が出題される場合は、学習者は問題演習などに取り組んで応用力を高めようとする。

近年の中等教育における試験と生徒の学習の現状について、藤沢（2002）は次のように警鐘を鳴らしている。それによると、「これだけは覚えよう」といったタイトルの、教育内容を要約した「参考書」が多く出回っており、それに頼った学習をしている生徒が多いのである。彼らは学習内容を自分で理解したり、自分で考えたりすることなく、与えられた要約を丸暗記しているだけなのである。これは真の意味での学習とはとうてい言えない。中学、高校で実施されるテスト問題が、こういった類の教材をそのまま写したものであることが多いという現状が、この傾向に拍車をかけている。

そのような中等教育を受けた学生が大学に入学してきている現在、彼らの学習に対する誤った態度を見直させるためにも、試験問題の作成には注意を払わなければならない。授業で与えている問題集と同じ問題ではなく、試験の場で改めて考えなければならない問題を出すなどの、工夫が必要である。

そこで本調査では、教員が実際にどのような試験課題を出しているのかを調査した。また、成績評価に関する教員の疑問や悩み事について、自由記述で回答を求めた。

#### 調査対象

調査1と同じ教員405名。

#### 調査方法

以下の5項目について、「いつもそうしている」から「そうすることはない」までの5段階で回答を求めた。さらに、「成績評価のあり方に関する意見や、疑問に思っておられること、悩んでおられることなどがありましたら、具体的にお書きください」という教示で、自由記述を求めた。

- 項目3 テストやレポートでは、教科書（やそれに準じる資料）を丸暗記するだけでは答えられない問題を出題する
- 項目4 テスト前に覚えておくべき事柄をリストアップして、学生に提示する
- 項目5 テストでは教科書や配布資料の文章をそのまま引用した問題を出題する
- 項目6 テストの出題範囲を事前に発表する
- 項目7 テストやレポートで、授業で使用する問題集からそのまま抜き出した問題や、授業中に与えた課題と同じ問題を出題する

#### 結果と考察

図2に上記の5項目に対する回答の分布を示した。

教科書や資料の問題をそのまま試験に出している教員は少数派であり、またテスト前の覚えるべき事柄（つまり学習内容の要約）を呈示している教員も少ないので、中等教育の問題点が大学でもそのまま引き継がれているわけではなさそうである。

次に自由記述に対する回答を分類し、表1に示した。

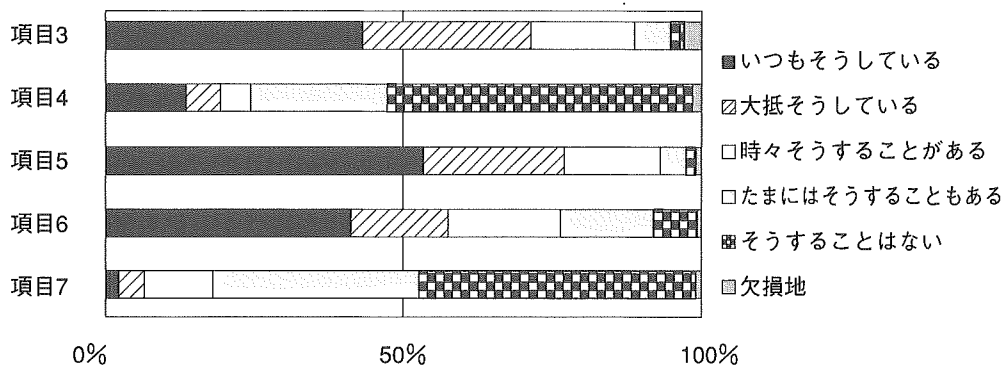


図2 テスト問題作成に関する回答の分布

学生の学力、意欲の低下	20
学生の、成績への偏った関心	7
学生の指示待ち傾向	2
他の授業や大学の成績評価制度への批判	22
出席点に関する扱いへの迷い	9
自身が実施している工夫に関する記述	9
心情的に厳しくできない	2
きめ細かな評価をしたいが、手間がかかる	5
その他 (アンケートそのものに対するコメントなど)	24

学生の学力や学習意欲の低下に関する記述が多く見られた。学生が学習することより成績をとることに関心を示す、教えられるまで学ぼうとしない(指示待ち)もあわせると、成績評価そのものというよりも、近年の学生の学ぶことに関する認識の仕方に対する戸惑いが多く見られた。

また、「成績評価の甘すぎる授業がある」「基準が教員によって違う」といった他の授業、ひいては大学の成績評価制度に関する記述も多く見られた。また、小テストを実施する、レポートを返却するなど、教員が行っている工夫を記述した教員がいたが、同時にそのようなきめ細かな評価をするために時間がかかることも、悩みとしてあがっていた。この点については、下記の調査5でも取り上げる。

#### 4. 調査3 学生と教員間の認識の不一致について

調査1と調査2の結果から、学生が学習に対して正当ではない認識の仕方をしてしていると教員が感じていること、それは成績評価に関する認識においても同様であることが示唆された。そこで調査3では、学生はどのような成績評価を望んでいるのか、そしてそれが実際に実施されている成績評価とどの程度一致しているのかを調査した。

## 調査対象者

教員に対する調査の対象者は調査1と同様であった。

学生に対する調査の対象者は、信州大学に在籍する2年生1076人。内訳は、人文学部102人、教育学部171人、経済学部86人、理学部138人、医学部27人、工学部243人、農学33人、繊維学部121人、医療技術短期大学部155人であった。調査時期は平成15年4月であった。

## 調査方法

教員に対する調査は、以下の項目について、「いつもそうしている」から「そうすることはない」までの5件法で回答を求めた。

### <出席重視について>

項目8 出席日数の多い学生には必ず単位を与える

### <テスト重視について>

項目9 成績評価において最も重視するのは、 Semester末のテスト（またはそれに準じるレポート、発表など）の点数である

### <過程重視について>

項目10 テストやレポートの点数よりも、学生の出席状況や授業態度などを評価の材料として重視する

項目11 テストの点数よりも、学生の授業に対する態度を評価の材料として重視する

### <成績評価の判断機会を複数もうけること>

項目12 テスト（やそれに準じるレポートや発表）の結果と出席状況など複数の判断基準を用いている

項目13 Semesterの途中で小テストや課題を出すなどして、成績評価の機会を複数回もうけている

学生に対する調査は、以下の項目について、「強くそう思う」から「全くそう思わない」までの5件法で回答を求めた。

### <出席重視について>

項目A 出席日数が多ければ、単位は与えられるのが当然だ

項目B 出席日数の多さは大変重要な判断基準である

項目C 出席日数が多くても、授業を理解していなければ単位はもらえないものだ

### <テスト重視について>

項目D 成績は Semester末のテストやそれに準じる課題（レポート、発表など）の点数で決めるべきだ

項目E 授業の内容を実際にどれだけ理解しているかが、最も重要な判断材料になる

項目F 最も重要な判断基準は、 Semester末の試験やそれに準じるレポート、発表だと思う

### <過程重視について>

項目G 成績評価の際には、テストの点数よりも出席状況や授業への参加度を重視するべきだ

項目H テストの点数よりも、意欲や努力が評価されるべきだ

- 項目I 学生がどれだけ努力したかが、最も重要な判断材料になるべきだ  
 項目J 一生懸命に努力した学生には、テストの点数が悪くても単位を出すべきだと思う  
 項目K レポートなどの課題をすべて提出していれば、単位はもらえるのが当然だ  
 項目L 単位を与えられるためには、予習・復習など授業時間外にも学習に取り組まなければならない

<成績評価の判断機会を複数もうけること>

- 項目M 一度のテストやそれに準じる課題（レポート、発表など）の結果で成績を判断すべきではない  
 項目N 成績評価のための機会（テストなど）は複数回あるべきだ

結果と考察

教員の回答と、学生の回答を比較対照しやすいように、項目の区分ごとに両者を並べて示した。

<出席重視について>

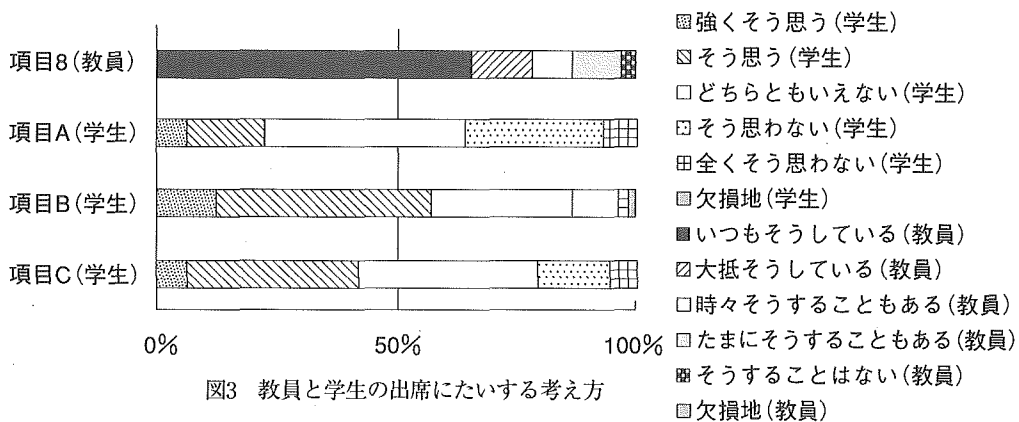
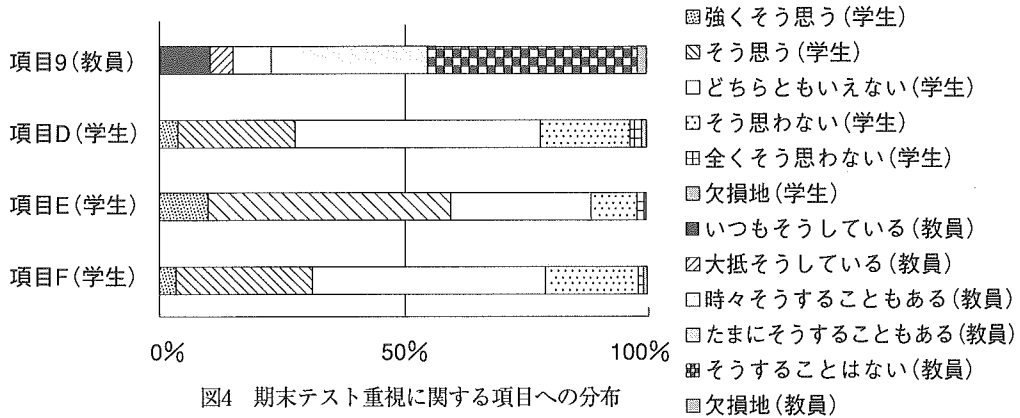


図3に、出席重視に関する項目への回答の分布を示した。教員の多くが、出席日数の多い学生には単位を認定している。その一方で、学生は出席日数が重要であると思っている者は多いが、出席していれば単位は当然に与えられるものと考えている者はむしろ少数派であった。

しかし、授業を理解していなければ、つまり学習目的が達成されていなければ単位は認定されないものと考えている学生は半数弱であった。「どちらともいえない」という回答も多いことをあわせて考えると、授業を理解していなければならないとしても、やはり単位は認定して欲しいという学生なりの複雑な思いが反映されていると思われる。

<テスト重視について>

図4にテスト重視、つまり学習結果重視の成績評価に関する項目への回答の分布を示した。多くの教員が Semester末のテストのみといった、最終的な学習結果のみに基づく成績評価は実施していないか、たまにしか実施していない。学生については、Semester末の試験で

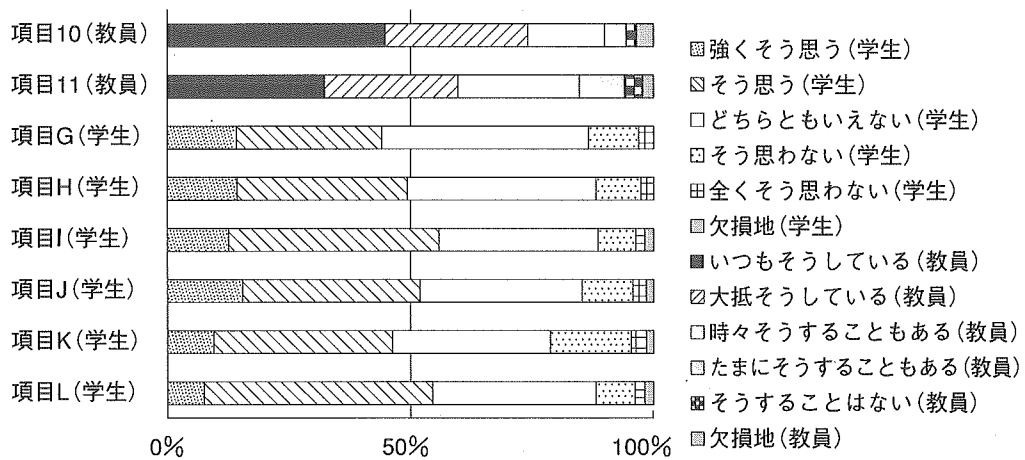


のみ成績が決まることには肯定的な意見が少ない一方で、「授業の内容を実際にどれだけ理解しているか」が最重要の判断材料であることには半数以上が同意している。

このことから、学生は学習目標の達成が成績判断の基準であることは理解しているが、それを1回のテストで測定できるとは思っていない、つまり「試験は水物」であることを強く意識していることが伺える。おそらくこの意識は教員にも共有されており、それが期末テストのみに基づく成績評価の実施を回避する傾向につながっていると解釈できる。

<学習過程重視について>

図5に学習過程重視の成績評価に関する項目への回答の分布を示した。半数以上の教員がテストの点数よりも、授業に対する態度という「学習の過程」を重視している。学生も同様に半数程度が学習の過程を重視するべきだと回答しており、これらの項目について、学生と教員の間の一貫性はあまり見られない。



### <複数の成績判断の機会>

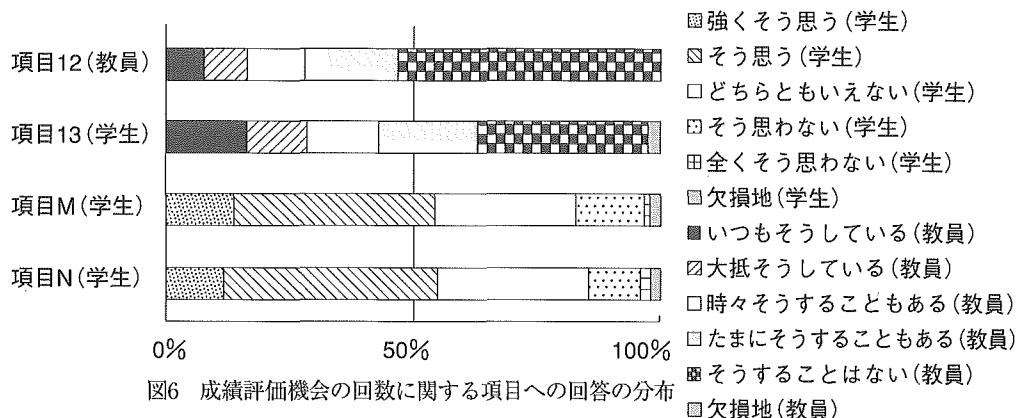


図6に成績評価に複数の機会を設けることに関する項目への回答の分布を示した。学生の半数以上は複数回のチャンス을求めているが、実際にそのようにしている教員は少数派であり、学生の希望とのギャップが伺える。図4の項目Eへの回答とあわせて考えると、少なくとも半数程度の学生は、学習の成果を上げていることを成績認定の条件と理解しているが、それを1回のテストで測定されることに疑問を持っていると考えられる。

確かに、1回のテストではたまたま体調が悪かったとか、たまたま失敗したということもありうるので、学生の希望も理解できないではない。しかし、彼らが入学する際に通過した入学試験も含めて、国家試験や就職試験など、いわゆる「一発勝負」の試験というのはどこにも存在するものであり、それに対する苦情は甘えとも解釈できる。ただその一方で、スモールステップで成績評価を行いつつ学習を進める方法は、プログラム学習という行動主義心理学者のスキナーが開発した学習理論(鎌原, 1996)の重要な要素でもあり、有効な教育方法の一つである。

スモールステップでの成績評価の有効性と妥当性は、授業の性質によって異なる。ここで重要なことは、それを導入することが有効である場合に、導入できる環境が用意されているかどうかである。複数回の小テストなどを実施することは、調査2にもあるように教員にとって大変な負担である。TAを配置する、可能なところはe-Learningシステムを使って自動採点するなどの環境整備が求められる。

## 5. 調査4 学生が考える努力

調査1の結果で、学生が成績評価について正しく理解していないと感じると、多くの教員が答えたが、実際に教員が行っている成績評価と学生の希望は、成績評価の契機になる試験の回数を除いて大きなギャップは見られなかった。この理由の一つとして、教員と学生の双方が成績評価の重要な判断基準としている、「学習態度」や「努力」に関する具体的なイメージが違っているのではないかと推測できる。実際に調査2では、学生の学習に対する誤った



認識に戸惑っている教員の声が聞かれた。そこで調査4では、成績評価の際に努力を重視するべきだというときの「努力」が、具体的に何を指すものとして学生に理解されているのかを調査した。

**調査対象者**

調査3と同じ信州大学の2年生。

**調査方法**

「テストの点数よりも努力を重視するべきだ」という場合、「努力した」と評価されるのはどのようなことだと思うかを、複数選択許可の条件で選択させた。選択肢は表2のとおりであった。

**結果と考察**

表2に、それぞれの項目を「努力した」と評価されるに値すると回答した学生の人数と割合を示した。

表2 努力したと評価されるに値すると回答した学生の数（選択の多かった順）

	人数	(%)
課題をすべて提出したこと	862	78.4
教員に積極的に質問に行ったり、もっと勉強するための情報を集めたりしたこと	625	56.8
欠席が極めて少ないこと	575	52.3
一度も欠席しなかったこと	490	44.5
遅刻、欠席が一度もなかったこと	486	44.2
予習復習など、その授業に関する自習を毎週1時間以上行ったこと	360	32.7
授業中に他の人よりも積極的に発言したこと	317	28.8
予習復習など、その授業に関する自習を毎週、数十分程度は行ったこと	233	21.2

自習を行うということを経験した学生が少数で、それよりも欠席しないこと、質問に行くことといった授業そのものに関わる事柄が努力と評価されていた。全課題の提出を努力と判断した学生が最も多かったが、これは授業そのものと自習の両方に関わるものである。

授業に出席することは、本来は当然のことであり、欠席がないことはまじめであると評価されることではあるが、努力とまで扱われるべきことではない。それよりも、授業時間中はもちろんのこと、また命じられた課題に取り組むことも当然のこととして、授業時間外にも自主的に学習に取り組むことのほうが、努力しているとされるべきなのだが、このあたりに教員が感じる「学生はわかっていない」という感覚の原因があるようである。8割近くの学生が努力であると判断した課題の提出は、家庭学習を要求するものではあるが、課題を出されてから取り組むものであるため、自主学習とは言いがたい。これらの結果は、教員が感じる学生の自発的な学習意欲の低下を反映している。

**6. 調査5 テスト、レポートの返却について**

教育活動における評価の目的は、たとえ多くの学生が最終的な単位認定の有無に関心を寄

せる現状があるとしても、評価を通じて教育目的の達成を確実にすることである。学習者はテストを受けることで、自分がわかっていなかったところや間違っていたところを発見し、学習プロセスを修正することができる。このような目的の達成のために、テストやレポートは学生に返却されなければならない。学習目的の達成を目指したテストを介した教員と学生のやり取りの実態を明らかにするために、以下の調査を行った。

### 調査対象

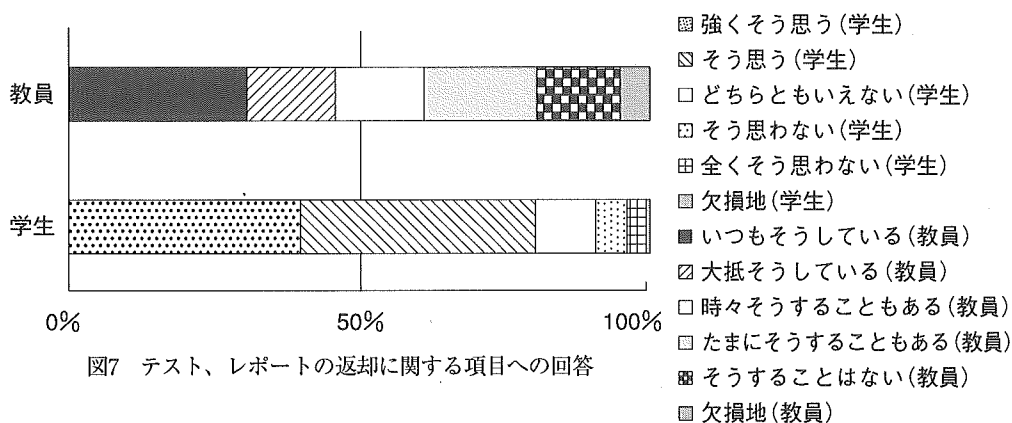
調査3と同じ教員と学生。

### 調査方法

教員に対しては「テストやレポートは採点した後に学生に返却する」という質問項目に対し、「いつもそうしている」から「そうすることはない」の5件法で回答してもらった。学生に対しては「テストやレポートは採点して返却して欲しい」という質問項目に対して、「強くそう思う」から「全くそう思わない」までの5件法で回答してもらった。

### 結果と考察

図7に教員と学生の回答の分布を示した。学生の多数がテストやレポートの返却を望んでいるにもかかわらず、実際にそれを実行している教員は半数弱である。このような現状は、教育効果を高めるという観点から見て、懸念されるべき状況である。



まず求められるのは、テストやレポートを返却できる状況を整えることである。 Semester末に実施される試験やレポートの場合、授業中に学生に返却することができない。また、教員自身が授業を振り返るためにも、また学生の不正行為に備えるためにも、試験の現物または写しを教員の手元においておく必要があるが、実際に受講生全員分のコピーを取るのは大変な作業である。これらの問題を解決しなければ、学生の要求に応じてテストを返却するのは現実的には難しい。

また、情報技術の導入が進み、オンラインでテストを受けたり、レポートをファイルで提出することが普及すれば、これらの問題の多くが解決されるので、情報環境の整備も求められる。

## 7. 総合考察

本研究で行った5つの調査結果をまとめると、教育効果の高い成績評価の実施という観点から、ポジティブな点とネガティブな点をひとつずつ挙げるができる。

中等教育の現状とは異なり、教科書や授業中に実施した演習問題をそのまま試験課題にしている教員が少数で、多くの教員が丸暗記では解けない問題を出題していることは、学生の誤った学習を抑制するために意義がある。

その一方で、試験課題の出題回数が複数はなく、テストやレポートが返却されることが少ないということは、上記のポジティブな側面を殺してしまう恐れもある。評価の実施とフィードバックを繰り返さなければ、学生に正統な学習を身につけさせることは困難である。また、この状況は学生の要望とも乖離している。

さらに危惧すべきことは、発展問題や応用問題を出題すると単位認定が可能な点数を取れる学生が少なくなりつつあるという現状から、このような「考えさせる問題」を出題しなくなる傾向が広まることである。そうなってしまうと、大学入学以前に学生が誤って身につけてしまった学習観を、修正することは絶望的になってしまう。

このような状況を防ぐために早急に必要なのは、試験の採点やデータの管理を支援するためのTAや、学生の学習をサポートするSAを十分に配置することである。TA、SAを雇用するための予算を獲得するために、TAが配置されれば教育効果の向上に有効であることも示さなければならない。実際に行われている成績評価の具体的なデータを公開し、現時点で教員がどの程度の作業をしなければならないのか、TAが配置されればさらに何が可能になるのかを取りまとめる必要があるだろう。

## 引用文献

- 藤沢伸介 2002 ごまかし勉強 新曜社  
鎌原雅彦 1996 学習の基礎としての条件づけ 大村彰道(編)教育心理学I 東京大学出版会